

<第2回>各組青少幼年教化担当者研修会報告書

<はじめに>

去る2022年12月1日(木)に「第2回各組青少幼年教化担当者研修会」が開催されました。各組担当者、部門委員、教務所職員含め31名が参加。第1回に引き続き、座談会形式で第1回研修会を経ての現状や所感を共有しました。それぞれの現場での悩みや活動を語り合い、聞き合うことを通して、今後の教化活動の展望を考える場となりました。

また、第1回と同様に『報告書』を作成し、研修会での意見を集約、共有させていただきます。それぞれに活用頂き、組内での情報共有と青少幼年教化活動の充実に資することを願います。

【期日】2022年12月1日(木) 13:30~17:00

【会場】教区同朋会館(姫路)

【日程】

時 間	日 程
13:00 ~ 13:30	受 付
13:30 ~ 13:45	【開 会】真宗宗歌・挨拶
13:45 ~ 14:05	「現状の課題と展望ー第1回研修会を受けてー」(青少幼年部門員)
移動・休憩(5分)	
14:10 ~ 15:00	班別座談 I
移動・休憩(5分)	
15:05 ~ 15:35	全体報告
移動・休憩(5分)	
15:40 ~ 16:30	班別座談 II
移動・休憩(5分)	
16:35 ~ 17:05	全体報告
17:05 ~ 17:15	【閉 会】恩徳讃・挨拶

【参加者】

青少幼年部門委員

第3組	長圓寺	湯朝 良尚	赤穂組	光明寺	青山 祐一
第4組	西蓮寺	山科 立人	備後組	光圓寺	河野 大介
第4組	興宗寺	木村 慎	安芸南組	極楽寺	惣持 留理
第6組	東光寺	廣瀬 恵美			

教務所

教化委員長	椰野 大輔
教区駐在教導	箕浦 彰巖
書記	藤原 了基

各組青少幼年担当者

NO.	組	寺院名	氏名	
1	神戸組	大圓寺	村上 英樹	
2	神戸組	福泉寺	北野 ひろみ	
3	第1組	乘願寺	矢木 卓二	
4	第2組	法性寺	松岡 彰	
5	第2組	圓光寺	多田 顕	
6	第3組	圓證寺	近藤 祐悟	
7	第3組	西教寺	藤谷 真	
8	第4組	善照寺	須貝 暁子	
9	第4組	願成寺	北風 智史	
10	第5組	正蓮寺	高谷 俊英	
11	第5組	善覺寺	藤郷 法充	
12	第6組	淨徳寺	海津 隆明	
13	第6組	東光寺	廣瀬 立慶	

NO.	組	寺院名	氏名	
14	第7組	西勝寺	後藤 園子	
15	第7組	光圓寺	後藤 海	
16	赤穂組	萬福寺	源 誓了	欠
17	赤穂組	明顯寺	内藤 和裕	
18	美作組	教福寺	齊藤 鉄也	
19	美作組	教本寺	楳葉 教導	
20	備中組	光明坊	勝間 海	欠
21	備後組	寶泉寺	三次 正信	
22	備後組	最善寺	廣住 祐樹	欠
23	芸備組	徳榮寺	三上 誓範	欠
24	安芸北組	妙蓮寺	水野 元	
25	安芸南組	正専寺	加藤 隆徳	欠
26	安芸南組	淨福寺	安藤 智宣	

【第2回各組青少幼年教化担当者研修会 開催にあたって】

各組青少幼年教化担当者研修会は、教区内それぞれの現場で様々な背景をもって教化に携わる方々が集まり、情報と課題を共有することで活動の支えとなることを願って立ち上がりました。

2021年度開催された第1回研修会においては、青少幼年教化について具体的な動きにつながらない問題が浮き彫りになりながらも、何もしないままにはしておけない「大事なこと」があるのではないかと確かめられました。

第1回の研修会を受けて、新たな取り組みを企画検討された方もおられると思います。一方で、青少幼年教化に踏み出すことを阻む「壁」を新たに感じられた方もおられるかもしれません。新たに動き出した姿に後押しを得て、共に悩む姿に勇気付けられることで現場の教化の一助となる場を作りたいと考えています。

改めて、前回の研修会からのそれぞれの歩みを共有し、今後の展望を新たにしつつ、これからの活動の力となることを願い、第2回研修会を開催いたします。

【内 容】

①はじめに、青少幼年部門員から「青少幼年教化の願い」と「共同教化の意義」についてお話しさせていただきました。

「現状の課題と展望－第1回研修会を受けて－」（青少幼年部門員）

この各組青少幼年教化担当者研修会の願いとするところは、このようにして縁あるものが一堂に会し、交流することをもってそこにつながりが生まれ、それぞれの現場での動きが支えられていくように、ということです。昨年度の第1回研修会では、初めて顔を合わせる方も多くおられたということもあり、「交流」と「(思いや課題の)共有」ということに重点を置いて開催いたしました。限られた条件のなかではありますが、少しずつ「つながり」というものを構築していけているように感じています。

そのうえで、今回の第2回研修会です。前回皆様から聞かせていただいたおはなしから、それぞれに抱える問題の大きさを受け止めたことでした。端的に表現すると、「青少幼年教化は大事だと思うけれど、なかなか動くのは難しい」というのが多くの方に共通する現状ではないでしょうか。

その現状に立って、部門から2点提示させていただきますので、もしヒントになることがあれば、この後の座談会での話し合いに反映していただければと思います。

一つ目は、「青少幼年教化」ということについてです。前回お配りした青少幼年センター発行の『青少幼年教化指針』からいくつかの言葉を拾いあげ、考えてみたいと思います。

青少幼年教化の基本方針について「青少幼年と共に悩み、共に生きる」と示されています。そこでは、「自らを「教化者」とし、青少幼年を「教化される人」をして立場を固定化するという問題点があったのではないだろうか」という振り返りを基に、「子どもの中にある普遍的宗教性としての菩提心に学ぶ姿勢を持ち、青少幼年の悩みを知り、それを受け止め、共に悩み考えてゆくことを最も大切にすることが必要である」と示されています。そこから、「青少幼年教化は夏休みなどの諸行事にとどまるということではなく、青少幼年教化こそが、私たちが教えに尋ねていく、時代と人間の課題を示す指標になるのだと思います」と言葉にされています。

子どもや若者との関係性において顕著に表れる私たちの「教化」についての課題を示唆するものではないでしょうか。そして、その課題への取り組みこそが、「男女老少をえらばず」として示される真宗の教えを我が身にいきらかにする歩みとして開かれていることと受け止めています。

「担当者」という言葉に、どうしても事業ということに囚われる私たちではありますが、「子どもや若者たちを集めて何かをする」ということに限定されるのではなく、「青少幼年教化」をより広い視野をもって考えていくことが出来るのではないかと考えています。

二つ目は、「共同教化」ということについてです。私たちはこうして、教区や組という組織をもっています。そこには少なからずしがらみや負担も抱えるものではありますが、それ以上に「つながりのなかでの支え」に目を向けていけるのではないかと考えています。

その支えというのは、思う以上に多岐に渡るものであるように考えています。例えば、実際的な問題について、前回出された意見には、「参加者が確保できない」「やり方が分からない」「方法がない」ということがありましたが、一人、一カ寺ではできないことであっても、組や教区、また、縁あるお寺や個人と「一緒にやってみない？」と声をかけあうことで突破口が開かれるかもしれません。また、それだけではなく、先ほどおはなしした、「青少幼年教化の願い」ということについても、私の考えが必ずしも正しいわけではありません。こうしたつながりのなかで思いを言葉にし、時には共感を得たり、時には批判を受けたりしながら確かめられ歩みを続けていけるというものではないでしょうか。また、教化に関わり続ける意欲というものも、一人で湧き上がってくるものには限界があります。共に悩みながら歩み続ける人の姿に勇気づけられ、後押しを得て初めて自分自身も力を得ていく。それが、親鸞聖人を初めとする私たちの先を歩んだ先人たちの足跡でもあるのではないのでしょうか。

だからこそ、つながりを構築し、より充実した支え合いの形を一緒に考えていきたいと思っています。現場で必要としていることを出し合い、組織として実現可能なこととの摺り合わせを行いながら、一緒に形作っていけることを思い描いています。

提起として始めにおはなしをさせていただきました。「こう考えなければいけない」ということでは決してありません。一意見として聞いていただき、この後の日程では、それぞれの思いを率直に語り合えることを願っています。

『青少幼年教化指針』
青少幼年と
共に悩み、
共に生きる



※余白では、青少幼年教化で大事にされている言葉や研修会の様子を
紹介していきます。

②「第1回研修会」後の変化について

I：意識の変化

→「第1回研修会」を受けて「青少年教化」の意識が変わったという意見が
多く見受けられました。

参加者の声（抜粋）

- ・コロナの現状、状況が変わってきている。その中で何かできることがあるのではないかと思います。休止していた子ども会を再開し、冬休みも何かしたいと考えている。
- ・第1回を終えて、様々な組の方と話せて、情報や、アイデアを聞くことができて楽しかったし良かった。組、寺院によって温度差を感じたり、何もしていない自分に気づかされた。この気づきが第一歩となるようにしていこうと思った。
- ・「場づくり」が大切。法座、学習会、研修会に限らず、まずは集うことを一番に考えるべきだと思う。
- ・自坊でできないのなら、組や教区で何かあると入りやすく、ありがたい。それを自坊に持って帰れるのではないかと思います。
- ・何かしなければならぬとは考えている。子どもに関わっていこうと思っている。
- ・「教化とは」と考えたとき、「何かをする」基本には、われわれ寺族が子供に、門徒さんに興味を持つべきだと思った。そして、私たちから「教え」をたずねていくことが大切だと思った。
- ・寺族としてではなく、一人のひととして出あう。それがいずれ「教化」に繋がると思う。
- ・前回の研修会では後ろ向きの発言をしてしまったので、今回は前向きなことを考えていきたい。

であう
つながる
ともにある

宗祖親鸞聖人御誕生
八百五十年・立教開宗
八百年慶讃事業
「子どものつどい
しん 東本願寺」



Ⅱ：活動について

→ 第1回研修会を経て、新たに始められた取り組みがありました。

参加者の声（抜粋）

- ・法務の中で子供がいれば話し掛けるように、いなくても子どもの話が出れば興味をもって話を聞くような、意識の変化を自覚している。
- ・ご門徒さんに法事の席で子どもたちを同席させてくださいと伝えるようになった。
- ・紹介してもらった本山グッズを法務に持参するようになった。
- ・新たな取り組みとして子供の心をとらえる意味で、シール、消しゴム、鉛筆のグッズをあげている。
- ・インターネット、SNSを使った相談を受け付けしている。
- ・バスを持っているので活かしたい。おじいちゃんおばあちゃんを通じてお孫さんやお子さんにつなげたいが中々できていない。
- ・こども食堂の話が出ている。
- ・今年はお経教室を計画した。
- ・教区への金銭的支援の要請を行った。
- ・組へ青少幼年事業を企画するように提言した。



→ 第1回研修会で共有しきれなかった取り組みや再開された活動があることも確認されました。

参加者の声（抜粋）

- ・子どもと接するのが苦手だが、お参りの時にハイタッチでコミュニケーションをしていた。コロナ禍で気をつけてできなくなっていたが、少しずつ再開している。
- ・お寺の子ども会と地域の子ども会をしていて、中止になっていた地域の子ども会が要望の声で再開された。来る人も増え、活動の後押しになっている。
- ・お寺で新聞を出していて、その新聞に地域のスポーツ大会などに出ているお子さんの名前を載せさせてもらったりしている。畑をしていて収穫を一緒にしてくれる家族、お子さんから手紙をもらったりする。そういったことからお寺とのつながりができているように感じる。
- ・近所の保育園や幼稚園の子どもたちを花まつりに招待している。人形劇や白象と記念写真などを子どもたちとしていた。保育園や幼稚園に相談してみると意外と来てもらえるかもしれない。
- ・保育園の役職をしている。子ども園でおつとめやお話をしている。
- ・夏休みには子どもたちを集めて本堂で宿題をしていた。コロナ前には映画を見たり、流しそうめんをしていた。
- ・さんすい会（三組若手の会）で前回の研修会の報告をした。この会では年一回イベントをしていた。（4月）
- ・子どもの来られる日に法事をしてもらっている。
- ・中陰の時など、お勤めと一緒にしたり子どもたちに前の方に座ってもらったりしている。
- ・近くに子どもがいないが、都市部で子どもとのつながりを確保している。
- ・変わった仕事をしている方（動物園勤務・南極に行っていた方など）にお話をしてもらっていた。
- ・宿題をみる寺子屋を月2回やっていた。夏休みにはお勤めの稽古をしていた。
- ・寺の駐車場に毎日子どもが遊びに来る。ケガした時や喉が渴いた時に、手当をもらいにや水を飲みに入ってくる。
- ・外で焼き芋会をしている。

『子ども会開設の手引き
「ひとりからはじめる
子ども会」』

ひとりから
はじめ、
ひとりど
出あう



③ 青少年教化活動に関しての悩みや課題について

→ 新たな取り組みの一方で、解消しきれない難しさや動き出したからこそ困難に直面したという意見も聞かれました。

参加者の声（抜粋）

- ・新しいことを始めるしんどさも、一旦やめてしまったことを再スタートさせることのしんどさもある。
- ・普段から話したり集まったりしていないと、何かあるときの声かけが難しい。
- ・子どもへお話する、伝えることが難しい。
- ・モチベーションを保つ難しさを感じている。
- ・子どもたちとの関わりは夏休みの活動が中心になっている。小学生の間は誘いやすいけど、中学生になったらどうしようかと思う。周りのお寺を誘いたいはまだできていない。
- ・中学生、高校生とのつながりを持つのが難しい。発信をどのようにしていくか課題だと思う。
- ・子どもが少ないが故に何もできない状態が続いている。
- ・宗教が違うからという理由で断られる。
- ・子どもを集めて、やろうという踏ん切りがつかない。
- ・都市部なので子供を集めていると苦情が出る。
- ・子供を知らないところに行かせることに抵抗があると言われる。
- ・自坊で子供を集めて何かをするのは難しい。
- ・法事も子どもをよぶことなく平日で行うことが多い。
子どもがいる間はいいが、離れていくと次の世代の子どもたちにつなげていくのは難しい。
- ・地域に子供が少ない。何かやりたい気持ちはあるが立ち止まってしまう。腰が上がらない。
- ・自分の子が大きく(中学生)なって行わなくなった。再開が難しい。
- ・子ども会にくる子が限られている。(いつも同じ子。新しい子がこない。)
- ・お寺でのカフェ経営を市に相談したところ、一般向けはNGで門徒さん向けはOKとなった。
衛生の決まりが複雑で始めにくい。
- ・子ども宅食、子ども食堂をしたいが継続が難しいと感じる。宗教法人には公的な補助が出ない。



→ 特に各組青少幼年教化担当者として、組内寺院への情報の伝達や共有に関する困難さが確認されました。

参加者の声（抜粋）

- ・組会は事務的な報告で中々話しにくい。組会の中で話ができるようにしたい。
- ・発言はできるが、どう伝えるか、言葉を考える時間がほしい。
- ・報告書を教区内全寺院に発送してくれた方が組内に報告しやすい。子どもたちを集めるとなると土日になり法務があつてしにくい。そうなると夏休み、冬休みなどになる。組や教区でやってくれると合間をみて参加しやすいと思う。忙しい中でもなんとかやりたい。
- ・組内で子ども中心の活動をというのを聞いたことがない。各寺で行っている状態だと思う。
- ・周りに呼びかけてみたいが頷いてくれないのではと怖く思ってしまう。
- ・どうすればいいかわからない時や言いにくい時などは報告書に責任を丸投げしてもいいのでは？提案すれば乗ってくれる人は乗ってくれる。失敗してもいいという感じでやっている。
- ・同じ組内の方と話をすることが中々ないので、話をしてみたい。
- ・前回の研修会を発表するにあたって、どう報告しようか考えている。
- ・組内での報告の難しさをどうするか。全寺院に報告書を発送するのはどうか。

小さな人々のために
ではない
小さな人々と共に
でもない
小さな人々に
許されて
彼らの姿から
真理を読み取り
ひたすらに
純粹なれ
未熟なれ
持続せよ

児童教化連盟



④課題に対する方途について

→ それぞれの課題に対してどう向き合っていくのか、困難を超えて動き出すために意見を出し合いました。

○考え方について

参加者の声（抜粋）

- ・寺院の価値を、集まる人数で決めてしまいがちだが、その価値観を変えるべき。
- ・各寺院、各組のカラーがあってもいい。「こうあるべき」ということはない。
- ・たとえ大変でも、嫌々でもスタートさせてしまえば学ばされることもある。
- ・出会いがあるということは悩みを聞くことも多い。答えを出すのではなく、「聞く」ことを大切にする。そして、相手が自分で答えを見つけられるように寄り添うのが良いと思う。
- ・われわれが目指すべきは「お寺の人」ではなく「話しやすい人」なのではないだろうか。間衣を脱いで共に過ごす時間が大切なきもある。寺の者としてではなく、一人の人間としてどう関わっていくかが大事。
- ・自分自身が興味を持つことが大事。
- ・行事、学習会など、「毎年しているから」「昔から続いているから」という理由でも、継続していること自体がすごいこと。自信を持ってもいいと思う。
- ・住職・寺族の意識改革や、やる気、それだけが頼りであったものから、次の一歩が必要。
- ・自分のやりたいことを、お寺を利用して行う。
- ・おじいちゃんおばあちゃんがお孫さんを連れてという光景が自然にあった。
- ・子どもと接するチャンスを逃さないようにしたい。お寺という場所がすでにあるので一から場所を準備しなくてもいいという利点があると思う。
- ・親から子へというアプローチも大切だと感じた。
- ・地域の役を引き受けることによって、つながりを広げていく。公民館が取れない場合などお寺の本堂を使用してもらうとか…。
- ・本堂へのお参りが増えている。来年はお勤めのおけいこをしたい。
- ・人と人の付き合い方に変化があるように感じる。地域の形が変わりつつある。



○活動について

参加者の声（抜粋）

- ・無いところからスタートするのではなく、地域のイベントや既存の行事に加わるスタートも良いのでは。
- ・お寺での法事や葬儀の時など、子供たちが過ごせるようなブースを作るべき。そこでは絵本を読んだり遊んだりしながら過ごす。「そこにいて、時を共有する」ことを大切にしたい。
- ・子育てする親の悩みをともに聞く場を開きたい。
- ・身近にできることで法事の場にお子さんに居てもらうように声かけすることが自分でも言えそうだと感じた。子どもの時の体験で大人になってからも良い印象を持ってきている人もいる。
- ・地域の行事と連携して行事を行うのもひとつの手だと思う。町の中にお寺があるので町の行事をきっかけにしていくのもどうか。お寺で落語やライブを行っている所もあるので。
- ・おじいちゃんおばあちゃんとお子さんお孫さんが離れて暮らしているので子どもを連れてというのが難しいと感じる。子どもがいないわけではないので、はり紙などで目につくようにするなど、今からどうしていくかを考え何か提案したい。
- ・お寺の近所の保育園や幼稚園に声かけをして招きたい。
- ・地域とお寺のつながりが難しくなっている。お寺と個人のつながりになっていくと思う。
- ・庭でできること増やして、門徒さんとの会話ができる機会を増やす。話しやすい⇒信頼関係築くことにつながる。
- ・日常にお寺を感じてもらい取り組みをする。外や境内（庭）でやれることは外でやる。寺に人がいて何かしている姿を見せる。
- ・行事のおかざり（花まつりの飾り）などを本堂ではなく外や門に近いところに置く。寺の前を通りかかる子どもたちを捕まえる。

いのち

「あそぼうよ」

「いっしょにあそぼう」の言葉で
仲良くなれた

時間がたつのを忘れて遊んだ

今は「あそぼうよ」って言うのに

勇気がいる気がする

でも「あそぼうよ」って

言われたらすごくうれしい！

今年の夏、東本願寺で

いっしょにあそぼうよ！

第三十三回同朋ジュニア大会

（2023年8月1日〜4日）



⑤教区や本山に対する要望について

→ 各自の教化活動並びに研修会の充実のために意見や要望を聞かせていただきました。

参加者の声（抜粋）

- ・「各組青少幼年教化担当者研修会」を楽しく、ワクワクするものにしていきたい。
- ・青少幼年教化の研修会に参加することによって、場に参加している人の意識づけがされるので、いろんな人が参加できるようにしてほしい。
- ・担当委員のサポートをするべく、教区から組長にもしっかり伝え、組会などでは組長から発信してもらい、共に進んでいくべき。組中心とし、予算化し、活動していくべき。一年に一回は活動するなど、決めてしまっても良いと思う。
- ・すでに子ども会等をしている寺院との橋渡しとなり、見学に行けたり、情報を共有できるように教区にサポートしてほしい。
- ・自分にスキルや経験がなくても、スキルや経験のある人と繋がれるネットワークの構築。より実践的な情報の蓄積と、その情報を共有・活用できるネットワークと組織の構築。
- ・花まつりの白象などのグッズを借りられたりできたらと思う。
- ・チラシを作るのも大変なので、テンプレートなどがあると助かる。
- ・寺報、案内状などの作り方講習会などがあってもいいかもと思う。
- ・ノウハウもいいが共有する場をと思う。教区の花まつりでつながりができたので、そういう場を求めている。気さくに話し合える場があればと思う。寺族だけでなくご門徒さんも一緒に話し合えるような場をとも思う。
- ・子どもたちとどういふふうに遊んだらいいかわからないので、そういう研修会をして欲しい。
- ・寺院でされている事例や報告などあれば教えて欲しい。
- ・青少幼年部員が見学に行って、事例としてレポートで報告して欲しい。
- ・実際に子ども会を行っている人をよんで話など聞かせて欲しい。



【部門からのメッセージ】

日常の法務での取り組みや、地域行事を活用した取り組みなど、一カ寺で出来ること、組や近隣寺院など協力するからこそ出来ることの案が出されました。それぞれが状況に合わせて出来ることを探し、始めていくことが大事なのだと思います。

難しさを感じておられる方も、報告書も参考にしながら「無理なく」出来ることを考えてみてはどうでしょうか？

聞かせて頂いた要望を受け止め、青少幼年部門の今後の活動を検討していきます。

・担当者研修会の拡充について

担当者同士がより密接に関係性を築くための日程や、ゲーム講習や案内作り、絵本や紙芝居を使った法話講習など、実際の子ども会に直結するような研修も検討したいと考えています。

・情報収集と発信について

教区内の子ども会の情報の収集と発信ということを青少幼年部門の役割として考えていきたいと思っています。

また、組内における本研修会の内容共有について、担当者が伝達しやすくするためのサポートが必要である旨を聞かせて頂きました。部門で協議の上、全寺院に向けて『報告書』を周知することを決定いたしました。また、組長には組会や教化委員会等で伝達の時間をとっていただけるよう依頼もしております。各組によっては事情が異なるかもしれませんが、各担当者でも話し合い、声を掛け合いながら共有の方法を考えて頂きますよう改めてお願いいたします。

〈おわりに〉

2023年3月から4月にかけて、宗祖親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要が勤修されました。慶讃事業における重点教化施策では「青少幼年教化」が第一に示されたように、宗門においては益々、子どもたち、若者たちと向かい合う私たちの姿勢が問われています。慶讃後の“今”からの歩みが大きな意味を持っているのではないのでしょうか。

今回の研修会では、前回の研修でのつながりを基にした前向きな話し合いがなされました。行事の再開や新たな立ち上がりについても、少しずつ動きが感じられてきたように思います。

今後も宗門、組と連携しながら各現場の教化を充実させていけるように、施策を企画・実施していきたいと思っています。ご意見・ご要望があればお聞かせください。